Mathematics Abacus Chinese character

料金後納
ゆうメール

MAC NEWS

２０２４年　３月号

約 50 年前に行われた伝説の授業

～青い目・茶色い目、教室は目の色で分けられた～

1968 年、白人プロテスタントの町・米アイオワ州の小学校で、教師のジェーン・エリオット氏はある実験的授業を行いました。

この授業は当時でも賛否両論があったようですが、最近では 2007 年にＮＨＫで取り上げられたり、日本の学校でも道徳の授業で取り上げられたりと 50 年以上経った今でも注目されており、社会心理学の専門家にも「社会心理学の分野において分岐点になった」と言われるほど大きな影響を及ぼすものとなりました。

今回はこの伝説的な授業を紹介しようと思います。放送時の題名は、Class was Divided（青い目 茶色い目 ～教室は目の色で分けられた～）です。

始まりは「差別」についての問いかけからだった

小学 3 年生の担任をしているエリオット先生はこの日、差別について考える授業をしていました。

まず、エリオット先生が生徒たちに黒人やインディアンへの差別の実態を質問しました。すると「バカな人たち」「ニガー（黒人を指す差別用語）だよ」などと答える子たちもいました。するとエリオット先生は、

『あなたたちには、その人たちの気持ちが分かる？実際に経験するまで分からないでしょう？試しにこのクラスを「目の色」で分けてみましょうか、どう？

そうね・・それじゃ、青い目の子はみんな良い子です。青い目の人は 5 分余計に遊んで良いですよ。お昼も先に食べられます。

茶色い目の子は水飲み場を使わないこと。お昼もお代わりできません。青い目の子と遊ぶことも許されません。なぜなら茶色い目の子はダメな子だからです』

と子供たちに提案します。エリオット先生は分かりやすくかつ個人の努力でどうしようもない条件で生徒たちを二つのグループに分けました。

それを聞いて、ある茶色い目の生徒は笑顔で頭を抱えて落ち込むふりをするなど、この段階ではまだ子供たちも「ごっこ遊び」のような雰囲気の中、実験的授業は始まりました。

それから普段通りの授業が始まりますが、エリオット先生は青い目の生徒が正解すれば『青い目だからさすがね』と言い、茶色い目の子が間違えると『やっぱり茶色い目だから仕方ないわね』などと、わざと差をつけた対応をしました。

生徒たちはすぐに変わり始めた

そしてその日のお昼休み、早速トラブルが起こります。青い目の生徒が茶色い目の生徒をからかったので、からかわれた生徒が手を出したのです。

エリオット先生は事のいきさつを聞き、それぞれに質問します。

『Ａ君、あなたはなぜＢ君をからかったの？昨日まではこんなことなかったじゃない。』

と聞くと、Ａ君は「目の色が茶色だから意地悪しちゃった」と答えました。すると他の生徒も口々に「〇〇君も茶色い目！ってバカにする」「そっちだって青い目って言うだろ！」と、たった半日でクラスの雰囲気は一変したのです。

そして次の日・・。エリオット先生は子供たちにこう言います。

『昨日は青い目の人がいい子と言いましたが、間違っていました。本当は茶色い目の子たちがいい子なのです。』

クラス全体に「またその話か‥」という空気が漂います。しかもこうなってくると、青い目をした生徒は納得がいきません。あからさまに態度が悪くなる生徒もいました。そこでエリオット先生はすかさず、その生徒を指さし言いました。

『ほら、彼が良い例です。青い目の人はちゃんと座ることもできないのですから。』

そして昨日とは立場が一転、青い目の生徒たちは茶色い目の生徒たちが味わった気持ちを味わうこととなったのです。この時点では目の色の違う生徒間で溝がとても深まり、殺伐とした雰囲気が漂っていました。

そしてその日の午後、エリオット先生は生徒みんなを近くに集めて語り始めました。

『青い目のみなさん、今日で何が分かった？』

生徒たちは「茶色の目の人の気持ち」「何かくさりに繋がれた犬のような気持ち」など口々に語り始めました。

『目の色で人を判断していい？肌の色で人を判断できる？道端で黒人やインディアンを見たら「ほら見て」とバカにする？』

子供たちはそれぞれの質問に満面の笑みで「Ｎｏ～！！」と大声で答えます。

そして、この体験授業は終わりを迎えたのでした。

今の時代にこそ必要な教育がそこにはあった

この授業を知り、個人的には「時代的に同じ授業をするのは不可能だけど、今の時代にこそこのような授業は必要だな・・」と感じました。

なぜ子供たちにこれだけストレスがかかる授業なのに今の時代に必要と感じたのか・・？

それは、この授業に「実体験」があったからです。

子供たちにとって一生役立つ、すぐに失われない本当の知識を身につける方法は、「実体験」や「経験」に勝るものはないと思います。

この実験的授業を通して、「いい子」のグループに属した時は知らず知らずのうちに加害者になってしまう経験、「ダメな子」のグループに属した時には被害者になる経験と、両方の経験をしたことで、本当の意味で「差別」を理解できたのです。（実験授業後の子供たちの表情を見ればそれが良く分かります）

これがもし、「差別はやめましょう」と伝えるだけの授業であれば、子供たちは頭では「差別はダメ」と表面的に理解はしていても、差別された人の気持ちやどのような形で差別が発生していくのかという本質的な部分は理解できないのではないでしょうか。

今は何事もあまりに簡単にすぐ答えが分かってしまう時代です。

表面的な答えをたくさん知っていることよりも、本質的に理解していること、なぜそうなるのかを理解していることを一つでも増やす、これが一生役立つ知識の正しい積み重ね方なのです。

ＭＡＣではすぐに先生が失敗しないやり方や答えを教えたりはしません。まずは自分で考えて行動してもらいます。自分で考え行動に移す経験、失敗する経験、そこから成功する経験をしてもらいたいからです。

ＭＡＣに通う生徒たちには、これからも数多くの実体験や経験を通し、本質を理解できる子に育ってほしいと思います。

発行：株式会社育脳寺子屋 MAC　MAC 真成塾